阿古義物語

四

122
42

東京帝國書籍館

流轉數回

阿古義物語

一名大儀ト人斬前

巻四

22
11
42

東京圖書館

和書門	小說類	二六函	三架	六三號	一冊

122
34

流轉數回阿古義物語卷之四

（一名 大磯十人きり）

江戸 式亭三馬 著編

TOKIO LIBRARY
東京市書籍館
明治五年
創立
FOUNDED BY MOMBUSHO

第九齣

耶麿姫怪異

明治十年購求

かくて雲平ハ天城山にとぶはり。耶麿姫ゞ仙術を受てより日夜心を潜めて。術の奥妙をきわめんとおもへども其粗を学ぶ心ゆ猶足らざるとし。まもなくおとさらふぢをゞこゝろ。耶麿姫これを視ていふ。吾ハ仙術の至重なるゆゑ兼心ゆしてハ至り難し。你ハいろゞしをゞむとゝくゞも用心いまゞめく。あつのゝなりふぢ術を試ミ業を賣るの念急なり。あたゞく妄ゆあるゝて猶山奥ゆ入り心氣を静ゆし。余念消くそのゝち妙所を伺へきうさんとて。雲平を将て山深く入り。まもなく心術を精練せしめて後。わとの

誘へども飯りるが。偖雲平まうしをれば。あられ此術をもて軍を催さば。日頃の宿志ハ果して遂るべしとうり係ふ。おのづから論じ此後奥妙を得る時をまつべ死灰となりて何の益ありぬんと頻りに謀叛の企をすめられば。耶麿姫重ねてとぶやどもづ甚心よ。ちさぶひね。ある時耶麿姫一人。窓の下に書を披くゝ見なるうしを。雲平竊ふ見るうに。これきりて仙術奥秘の書なるべ。いつもして奪ひうらぶやとおりひられば。兼く練る術を施し。印を結び文を唱へくまつ所ふ。許多の蝦蟆おりひもかけねこ現れ出却て雲平が身ふ蓋重り。其うるさ云ものかぎりなし。雲平こハ朽惜とおもひつゝさるべ術をやめ。ふせども。蝦蟆ハひとりの花著て。甚數增るばかりなれば。いづくとべきと身をうむふ。耶麿姫ハ雲平がものびる一室をこ去りて。いつもや我殿もんと何等の術ありとも此秘書をば奪うるべなや。假令死灰と

なるとても奥妙を得る時あるべし。此秘書ハつさ見ぬまづ目ふ其蝦蟆を放ら罷迯と法ハあると莞尓と咲ふて坐しかゝり。雲平ハ手をりかけとも去べなられば我誤り恕せしと只管ふるばかりなり。其時耶麿姫ハ仏ちづふ文を唱へくさゝふば目今ゆしまわふ。此後を慎こゝ云さ唱と一声叱る下ふ。數多の蝦蟆ハ影もなくかさ消を如くぞ失ふ。雲平が惣身玉のごとく汗を流し。首を扑て罪を謝しられば。耶麿姫咲ふて居るのこなり。此より後まとく術のおよばざるをありて。程ちさび居るうしが雲平熟おりふ。此耶麿姫をゝ世ふ出るば。我未熟の仙術ハ白日の蛍火なるべ。ひそふ彼を害して後の禍を拂ん。さゝふば此術これ一人ふとゞまれば天が下ふ懼るゝ敵なし。ちのこなるべ諸國の銭財をあつめて歡楽を恣まゝ。と一ツの惡念きざしられば。ある時耶麿姫が弓断をゝとまし既ふ刀を拔んと

さる時姫はなをも悟りおろん忽ち身体疲れて庭の巖石の上にまさぐり。自若として坐しゐるを。おの形勢をこんるよりも。老女をもじめ許多の侍女婦童おいらるまで。手ヒホ得物を引提てくぢらくと走り出。雲平は追ふ巻てのべさじ物をとひしめきね。雲平かくとこんでぐれがさてハ我謀まるも悟られるよと只呆ゐ呆るぐだりなり。耶麿姫ろうホ雲平を直下ていふ。

いうホ雲平。汝ちふぞや我ハ是奥州泰衡が女耶麿姫とハ根ゐ。とよ。是ハ天竺二摩迦陀国。柯葉林ホ穴居る。玉芝道人といふのなり。我ホ善ゐ。唐山の麿道士蝦夷仙と心をわせ。蝦蟆仙人の仙術なりといつりく。竊ホ蝦蟆の妖術を施せり。手練磨の法を修して。普天の下。卒土の濱。ろぐ麿道ホひきいれんとをれども。科戸の風ホ吹儺われ。武国ホとゞはりゞ。素らの術ハ唐土毛山ホある。ホの石撞といふ大蝦蟆。又一種ホて。益州の北平山ホ玉芝といふ白蝦蟇を捕へく。其生血を食ひしの。ホ蝦蟆の性心我胸間ホとゞまるさんホ。許多の蝦蟆を使ふこと。我ホ。我眷属ホれ鈎注赤蝦蟇をはじめとして。青城山の肉芝。あるひハ輪蝦蟆。蛤蟆。田夫ホ。ホしハ陰蟲。鼓造。苦蠶。まこハ蟾蜍。まこハ金背鼈。車。等ホいるまで。本相をあらそべとありれば。公得くいとて傍ゐる老女忽ち一箇の大蝦蟆と変じ。ホれが。是乃ち鈎注赤蝦蟇とゐのりて。赤き色ホ老蝦蟇なりるを。かゝしゝ山林動揺して。許多の蝦蟆あられ出るが。あるひハ赤く又ハ白く。或ハ青く又ハ斑なると。各耶麿姫を圍繞して眼を怒らしひうへり。肝太なる雲平も此光景ホハ驚謐ま。ハとホいふと懼るゝ。姫かゝ汝ていふ。汝たゞ今我ホひそに害せんとをうしも。素神國の素性なれば八百萬神應護の徳ホて。自然と神の導に汝ゞまとりて我を亡さんとをる

耶魔姫妖術火速扨二枝續
河内義物語 巻之四

所なり。されど汝ハこゝ妖術を受られが。我ハ敵ることあたゝず。假令ものゝ目ハ万物の美根をぐゝも心ハ魔道の部下となりしゆゑ。正法正路ハいうも難し。授る所の幻術を忘れんとすれど忘られぬ。つゞ蝦蟆の奇術にて八万四千の惡魔外道。十恒河沙の惡鬼羅刹が。刹那の間も身を離れず。汝が守護しめるかゝる。魂を魔界を走れり。我そもく此國ハこゝはりがゝれをもれゆゑハ。汝を此所ハおびきよせ。蝦蟆幻術の法をのとさはゆくゝ。ものゝ。汝が女色をおゝるゝ。汝幸ひ。其好ひ所ハよりて。假ハ麗しき少女と變じ色をのんで魔道に隨入れゝ。玉芝道人が密計なり。されど竊ハ汝が卓量を窺ハに。其器小さくして魔界ハなるべき腸胃ハあらぬ。此後賊主となりて世をゝとも。蝦蟆の術をくよをくへて。魔道へと導くゝ。惜こそ侍へどあらば。かゝるべ蝦蟆の障碍ハよりて。竟ハ其身ハ亡さじ。汝足らり

本國下總ハ立こゝ。外川浦より海上へ突出る巖崗ハ龍王。彼岩崗を。往年つゞ寓せ一踪なりこゝ。今ハ仙が崗と称するは。風ハ其説と。後ハ山をあて前ハ海をひゝ。進退自由といひ。殊ハ要害堅固の寨なれば。汝ハ後彼首ハ富貴ハたのもの。我ハ天竺ハ皈して素の石室ハ心ゆくまゝ。ぜ我本相を現して石室ハ籠ると。ぜしとて。さろくと立よとこゝえりれば。ゆにかゞしる檜扇を汚ぬ古びし羽扇となり。身ハまとふる五衣の錦繡綾羅とゝえつゝ。彼れちぎれる鶴の毳毛と変じ。婦婢ハ容色ハたちまち鬼神のごとくに變じて。眼ハ麻ゝる鏡の如く。針を植るハ育し。白髮を振乱し。虎髭左右ハ立ちて。然ゝる其形相。おそろしるどおろなり。雲平もりゝ地上ハ。汝ハ然ありけるゝ。さハ考ぶして只今ハ。恭衡の息女と。

愚なれ。此うへいよ〳〵師弟の因を結びて奥秘を伝へあるべし。と恭しく演ぶれば玉芝道人かうべを打振り。否〳〵汝ふ伝へく益なし。謁見ることも是もうでぞと彼半ば居うし巖石の二丈四方もあるべきを。拳をうつて丁と打ば其石たちまちに二つふかれく。玉芝道人さるくと中に入るよとこんてめれば。石ハ合して原のごとし。さるふ道人の像ハ。鏡ふ影のうけるがごとく石中ふ潜る形容。四面ふ透き徹りてこえ〳〵ばが。やがて石面より首を顕ハし汝ぶ旨を克く護れ。我ハこれより支那震旦ふ横行されば汝が累とのるれ日めふんや後患をかうるべして疾く〳〵山をれと示し。且許多の蝦蟆ふ對して。你等ハ吾ふ先ぶろそ天竺へ花行くべしとれくと言の下より。一條の虹となりて虚空をるるふ飛行ふり。雲平慌忙く。且摧くとぶもれども。玉芝道人耳ふもかけず。帰去来〳〵ハ言と倶ふ彼巖石根ふり震ぐと脅しく。鶏卵を空ふ擲しごとく。瓢くとして飛去りね。雲平ハ管忙然うてあるうしに一陣の暴風さつと吹来り。山谷倉卒に鳴動して。巖石巨木を震倒し。大両車軸を流しければ。雲平胡乱騒ぎて欄近く倚ふんとるれふ是ハいかゞぞ。今までありける殿造り。古られども綾錦の帳破られども甑額の簾。金壁繪障子のたぐひをとゞめて。高蒔恵の御厨子黒棚ふ。ふるまて。尾落くと音ぞうけば。椽扶疎ふ傾きて幾年ふ古寺ハ茅の簷も荒果〳〵て荒舎とぞなれり。ふ体。けぶに應じて婢女童とおぶ〳〵しのも。或ハ腐ぶ或ハ朽ふる木像の。十六善神。閻魔法王。倶生神。奪衣婆。二王。阿羅漢など。眼耳鼻口もかけ損じ。五体不具のれ古佛の半蔀雨折戸の萠れさるふ靠かゝと。又ハ高巖縁の畳ふあるべ。もとろふ桔〳〵れ草枕ふ。こけむすごとし。形勢ハ腐草の褥ふ朽木の佛像。豆ハいぶせくるとても。

夜ハ般阜屢の光りをや競ふらん。是皆玉芝道人の妖術なれば。雲平その玄妙を感じて。舌を揮ふばかりなり。

○これより後雲平ハ玉芝道人の言ふまゝ。下總の國外川浦なる仙が崖ふ匿れ住を。山海の賊主となりて小賊千騎を部下ふ従へ。栄曜ふ誇り。歡楽に長じて。美女許多ハ寨裡ふ擒おくるゆ。且二疋の狐と。妻沖津が寛ふまうて禍を得らるゆのたぐひ。都て比類なく暴惡の始末ハ後篇に委しう記せり。

第十齣

蓋姦袖師浦

さても大磯袖師浦の賢兵衛ハ。主家の滅亡を歎くといへども。素より時運の然らしむる所なれバ力およばぬ此うへハ老母床世と我家ふ養ふんとて。

ども阿漕平二諾ハず。既ふ床世をはぐゝめ眷属を具て。復讎言ふ赴ゝなれば。賢兵衛もそべなくて。心ぞうの紛別しておのれハ家ふぞとゞまりるゝに慳貪婆蓬ハ兼てより人賈人愚六と姦通してゐる。此わどを思ひいらく。憎うて。又ひとつの惡計を巧ゝ。されど此家ふ秘藏する祖先の木像動ゝれば汗を流して惡兆を曉るゆ。ひとつの妨害なれば。邪魔を除ぞやとて竊ふ木像を盗出して海ふ沉る。斯こハ二つゝで賢兵衛ハ木像の失るとゝ大きふ駭き。斯奇瑞ある木像なれば。此とゝ主家の断絶を歎きゝ。自然と形容ハ遠せ。おのゝよ。ゝさもあれ。祖父より傳ハり木像を。五代と久て失ひしハ先祖ふ對く越度なりとて。且晩ゝ苦ゝ労する。ゝふ人賈人愚六を過日橘内が妹薗葉を勾引くよう。多くの銭を得つれども。好める道の博戯して。今ハゝや鍋鉢平目半し手ふ残ぶ。一升量の瓢箪一杯の除醴

ぐふも飲得難き。痩臕の枯世帯。いふかりそれぬ内流い莚よりはくむ壊壁遠州
産の破戸を。うれて吹込む小夜嵐。寒を凌ぐ物とては。綿子一重を合衣とも。又
褥とも夫婦が添臥られぬ人目のいぶせさ。ちくも底をそぐめ。汁も茶わ
も藥ゆも。七伎の業をゆを破鑵ゆがゆの上なり。翌の朝餉の料ゆとて。牧
茅垂衣と諸共ふ典舗の庫中に身を沉め。百八十の孔方となれば。夫が米とも
汁菜とも。わぶられてうとうれ貧家の光景。心うとうとありけるも。こんるに忍びぬ
てうなり。食人馬ゆも好交的と中ゆ。賢人が居ぬ間を偷て。蓬児
ひそうふ忍びまりの愚六が家を窺ふ。麻子ゆ親里へ往うとありて。今宵ゆ
家ふ在ふされば最究竟と裡よ入り。二人少刻密會しゆれが。俄雲をそうり。
雨ゆそうて後。蓬児がいふやう。係と妾とかくまで密ふかうくどの人目の関の繁
きれば。竟ふ顕るくゆ一定なり。さふうふ悔よも甲斐ゐ。先ざるとうれを人を

制をと中ふん。物の本ゆく紙ゆれり。此日頃憎しとおりふ。遜女の瞿麥めを。
今宵ひそうに誘出て係のまゆ度をべ。係よく計ひ人彼的ゆ遜親の他眼
ゆ人も。十人茲ふ勝うり。娼妓ゆ售ぐ金の高ゆ祇ぐり決算。賣主のうふ
あるべ。とれゆいうもとゆりけるば。素うり欲心満溢うれ愚六なれば。やうく
と打點頭。負うる子ふ浅瀬をゆうとゆ此夏よ。我足元ふ蓄在る金とうう
ざり。僥倖江にの里の遊君長。眉目うれ阿曾比を欲きとく。三島の驛ゆ
泊舍うりておつとなれば。今宵ひそうふ勾引て。足柄越の閑道より三島の
泊へ誘引ふぶ。首尾よくはゆうふば金の山割親判清判肝煎判此愚六又
なれば。山割とゆふ内ゆも。六分ゆ我等ぐ獲物ゆり。疾このひまゆ連すもと。
いきり切くこえきれば。蓬児打咲ひく。早ゆ慾欲ゆふ。甚欲心ゆぐ小
さし。假令少女一人勾引うとて。係と妾とぐ生涯を過れ程の徳ゆ得つゆじ。

先饗麦を售くる上に又一ツの謀あり。你が妻の麻子と。吾夫の鰥者爺と。人をくに毒殺されば。跡を野の宮高砂の尉と姥さまでかくれ女夫さくぶ你を後夫として。那家を奪ふべし。心あらやいくもとつくば。愚六聽もあくを使巧ぶり面白し。此上は斤はもあく饗麦を誘へ已謀ん密ふを好とする。壁ふ耳あり。垣ふ目あり。声の高砂扇と姥うくね惡人去まあと。利ねをたくも門首へ出る而ふ。大事は障子の破るう。始終の動静を垣間見ん。妻の麻子物蔭より趣出く。二人が狭を志ときらく寃重れ涵泪吻と叫びて聲饗いふ。あうもんきら二人が此頃の為体きらめて如ゆるべとも人ども。嵯ふ夫との征拠もあれば今まで言はざりしが。今宵親聖ゆあれば。理あは男女の咽く物音ふ細ぞめくと忍び侍く窺人而ふ。案ふ遠ねを密ふ。志のとふ大膽ふる惡計怕しとも悲ふ。

呆く泪も出さりしぞや。たとひ妾は嫉のれて他婦ゆえ人拉ふふは支離の対なれば。憂代まーしよ若様よと責債らくはふさど忍べ。ぜりて毒死もはしるふは命は露塵いとつ程ども。賢吾諸どの祝子は代なふのとせん惡計をおりひそぼり給はれし惡の報は忍ちよ你等二人が行末も何安穏よめぞきら。愚六どの。蓬児どの浮世の義理をもあり人。哀をもふれくよと。彼首此面を伏拝ま。姑の念はあくも我身を捨る強異人を助く。信実の形容は醜く存るとも心の裡こて蘭れ。二人はあづく言をもいつでのりれが。蓬児は愚六よ目ふしを吁誤り愚六どの。現在你ふ連添ふぐふ濁よ深ね蓮葉の。浅き公の底ふりき麻子どの志ばよ信くくれ教訓。志ぐと身にあうて嬉泪ふ言さ人出そ。麻の中なる蓬ふる。之譬の欲ふも咏りしてく曲ふ已代蓬児ね

直かる麻子の心ゐはれて。今より後わが名を改め。是まで其のるゆ忌切る業ら
ゞ你ゆなれ往吉と思ふ切。麻子との其心は恥て忌ひ斬れ。疾とるひ斬れ。
斬れと目くゝしるとゝ露ちくゝて麻子ゐい泪の新ゆめげ。さてゝい忌ひ切りゐふ
う。めら猿しやとくまを合して。伏拜む脊後より。いうゆも忌ひ斬くゝ是ゝんと
傍よ在合ゐ鉄打振り。襟首めゞゝそくゝと斬れ麻子ゐ吻と叫びけゝ。
痛くまゞ眼眩くゝとゝとゝもせゞゝして振りゝゝゝゝ歎き害さんとの方術
ゐくめりけるゝ。かくまゞで妻ゞ信代あゝし。夏をゝけ利をせめて諫ゐ言と
きくゝれゞ。却くく又ゝかくゝよるゐ。憎やゝけれるや恨やゝと夫ゆ目ゞけく
浪蹌ゝ。毒食ゝゞ皿まゞで嘗ゝ。と髮を抓んゞゝりよせゝゝと一盛七轉
八倒即便息ゐ絶ゝけり。吁めゝれむべし。身を瘠ゝ。涙ゝ隙もなゝ麻子が
絶身。げゐも便ゐゝるゞゞもなりさゝめりゝ。蓬児と俱に麻子ゞ死骸を

搔抱き。南無阿弥陀佛と緒声ゐ古井の裡よ投墜し。寛ゐと咲ゐくゝ
所よ代物音ゐ驚きて。賢兵衛ゞ娘曜麦何ゐゐんと紙燭を携へ出ゝ。
母さゐいらゞこゐゐゝゞ物音のまゞけゝいしさよ母さゐくゝと呼ひつ。脊門首
ゐ歩ゐゝを愚六大きゐ喜びて此方よりまゐるべきゐ。ゐ温ゝ茶し。こ
背後より搔抱けゞゝゝ何者ゞ悲しやゝと声と放ちて泣叫ゐを蓬児眼を
ひき出しゝゝゐれ恩開しゝ下司女郎め。継母の情ゐくゝ你を遊女ゐ賣渡せゞ後
錦の紿布ゐ纏ゝ。栄花の身となるをゞ去くゝゞ泣面の見苦しさよとる
速くまゞ巾ゐゝとりて。假ゐ猿轡となゝれゞ哭麦い悲しさゐかゝなく。
叫ゞんゐも声ゝゞ只身をもがくゞゝうゝ。愚六ハ此用ゐ山越の用意せん
とくゝ。兼くく兄の弓一張よ矢二筋を取添くゝ。身狂よ打扮ゞゞゐ哭麦
を小服ゐ拘くゝ。出去ゝんとゝ表面ゐ不思議ゐるゝれ古井の内より炎ゝと

燒きと育しく卒ふ水勢湧上り圖浮を暴ふ麻子が形容髣髴と現れ
ふり。強悪不敵の二人なれがるもせどして行んとすれ妄執の雲晴やらぬ。
寃の一念附纏ひ進めば退き。歩めば引る後髪。くるくと引回
されて目眩きさしりの蓬児も身体労れて合彼と伏と。愚六も倡よたぢろく
とよろめきたり。踏ちぶすりとれ力足ぴうれなぐりに出去ふり◎かくて愚六ハ
曜麥を誘ひて。足拵越よさしかりて。甚夜ハ山中にわけして。次早千石原と
いふ所ふ到れ此所ハ往還も稀なれ困道あて。茲木繁りし松原ふたば
物寂しさいうんかとなりぬまして曜麥ハ。屠所の羊ハ想ふて。歩とこ悩めれ
その形勢。目ハ泣腫して色青さ。恐ふ沉む淵の中。ひとりあハ父を慕ひ。
ひとりあハ母を寃こえとぼれば歩めとて。杖ふ打る悲さハ那落ふ隊る
罪人の。鬼ふ引る苦痛もかくやとぞうり哀なり。ふういふ愚六どの所徒

逃るとも逃しもぜゑど走るくてもも走るれね憂身の殺をあきらめるれば
假令傀儡ふ倩るるとも。さるくにいとりなぐ。蓋ふの易るくるねハ參メさまの
身ハ上なり。勾引されしを受めぐめくがれ死や去めるるんとるんべ跡ふ
ひるるる。足弱車幾回りめぐる因果の譏ますや。你情を知ふ。妄執
逃るくふ賣渡して。去れ境をゆしてるる。生ある内ふ今一度。參さまのほ
祇拜こと。甚悲ふ情ふ。此一條ハ見る非ふかるるくてるるれと。兩ぐとかれに況
只伏拜ひぐうるる。流石ふ強慾の愚六も。恩愛父子の哀情を想像
をとしい心ふるるるぐ。狂乱をたげまして。人々ハ今ハ何をつらぐ。
今般你を遊君ふ賣るるんとすれ發端を。你が參親質兵衛。さる方ふ借
めりしぐ。百両の金ふ逼りて你を賣るふ究るる。されど你が數んるれ不便さ
ふ。其夜ハ家ふ在合ぐ。るれくをるるて形ハ討るせるりのなれぞ。されを

賓兵衛も跡より覓て往べかるべし此事深く悔しむぞ歎きし言なれども伜が
孝心これにあらびて今白地にきこゆるなりと偽しられバ瞿麦定ところ
認て储ハ然ありけれよる。然ハあらで斯れける不孝といひ母を恨とし継れ
仏根体のおもかん亦さへ恥かしきよといひても泪を拂ひ面を正しくして今へ
储こし猶にかくれ雲もなしとて。愚六ハ先ぶら歩ところ。孝心の程ぞ健気
なれ左右して行程十町余りも過ぬれど一人旅とおぼしき旅客。柳行李を
肩に掛ながら木の根に尻かけて憩居たり。愚六も足を休めんやとて瞿麦
と倶に傍に尻かけて。おなじ憩居ながらに彼旅客愚六に對ていふやう。和殿
ハ何方より何国をさして通りまするやとありければ愚六答て。在下ハ大磯
の辺に住る者なるが足なる娘の多病なるによりて箱子の温泉に浴させん
とおもひて行くなりと回答ければ。彼男もおのが往方など物語りぬ。

互に旅の道連なりしさまを談りて行ければ彼男愚六が携へたる弓矢を
見ていひけるハ。在下兼て射る業を嗜まれぞ名ある弓箭おほく所を
藏されど陸奥の安達の真弓ハ古今にもよく詠たれども。いまだ得ず
さて過剋よりこそ見まゐらするに和殿の携へたるこそ疑もなき安達の真
弓なるべけれ。在下が帯たる此一腰ハ無銘なれども其の業物なり卒爾
の吉言なれども。此一振と其弓箭とを交易して給ひなんや。さらバ和殿にも
益あり。在下も兼ての望足ぬれバ此上の喜びなし枉て承引あれと強に
需めけれバ愚六素より欲深き性といひ。且ハ何弓ともしらぬ古弓箭なれバ
鳥嚇ばかりの品に換て。彼業物を得んこそ造化なれと心に思惟しけれバ
快く諾ぬ。彼男喜べれ形相して一腰を愚六にあたへて储弓箭を受るより
疾くはやくと素富しでゐるが。やがて弓と箭柿つがひてきりきりと彎しぼりて

愚六が方ゑ指當て。安達の真弓試ゑ。矢一筋まゐらせんと乞へゝれば。愚六
はづかして歎息しことゝあるとゝ人ども。今更ゑせんとぞわゝく。面色土のごとくに
變じて。身を縮め声震し。只助けまゝくと泣居たり。饗麦形とゝれたりも。
愚六が脊後ゑ立匿て。慌忙惑ふぐうなり。甚付彼男愚六を瞋ぐゝいゑう。
汝ハ誰ぞと。他の少女を勾引とく人賈人とゝがえたり。且甚一腰を我よ飯せ
と叱とゝれば。愚六泣く一腰を出して与ゑ。彼男一腰を取て掌て。
偖娘をも我ゑ渡せとありければ。愚六命の惜られば。黒儀ゑ及ぐと饗麦
を押出して。おのれハ蔭ゑ平伏居たり。甚時瞿麥ゞをとりて傍ゑ居置。
粧弓矢を離さで愚六が方にさし向け。一くゝゑ礼問とゝるゝと愚六ハ命の助り
とゝゝゑ始末をのとゝぶゝ白状しゝゝれ。彼男泣流ゝとる饗麦ゑ打むゝ。係
かゝゝぶゝ心易ゝれ達麿時ゑ外れゝる。此人勾引の古強盗ゝ。命と取べき

奴ゝれども。仔細ありて助けゝるゝ。西玲係ハ遊君となるべゝ身なれば。今
より後我家ゑ養ゝゝく。在下ゞ娘とゝ。慈愛てゝゝゝゝゝ。さゝゝ阿曽比
ゑ賣れんゝりも。いゝゝゞゞ造化ゑゝゝゝゝゝ。又此奴ハ係の讐なれども。我が
為ゝゝゝ功あるゆゑ命ゞゝゝハ助るなりとて。愚六を宙ゑ捉て傍なれ
亜木の松ゑ縛りつけ。若夜ゑ入りて狼よ出食べ。夫を未期と記念せよ。運
あゝゝべ往反の人を俟着て。付縄解ゝゝゝゝゝ。犬骨折て饗麦形ゝゝゝ
なりぬとも。命代りとめきゝゝめよとて。饗麦を小脇よ抱て飛ゞゝよ失ゝゝり
ゝれ。此張客ハ何者ゝゝゝ。是ハ盗賊の張本。白波雲平が家来ゑ室平
五郎重綱とゝゝ者ゝゝ。京の片山里ゑ寓て。高家貴族を駭かし。強悪
を行ふ始末。且饗麦前門ゑ狼を送りて。後門虎を迎ゝるゞごとく光景此
後ゑ至りてゝゝゝゝの寒苦ゝること。後編ゑ委ゝゝ記せり。◎それハさて置

大儀ゆへ娘腎妻が踪蹟もれざれば。賢兵衛驚くこともわうとのふに。蓬児
て五ぶ惡計を蓋人為ふ。倉庫ふ狼狽られ氣色を現ハし。生もゆかね空泪
の。流れ兼ると涕くふ流しけく。夫の留守ばら秘義の狼を失ひてハ分說
も立難ければ。妻ハ自害をくれるど打歎きて。狂乱の必ず立騒られで近隣
の人ぐも誰とハ露ちらで。蓬児をさほぐとつぐさめて。まづ自害をべらでも
あるされども賢兵衛ハ聾妻がるを忘て周ぐ。早晩尋ね覓るが。今霄
も二里ゆとの山里ふ。些のちぐめりるまく。手挑灯引提て出行んと
それ附。蓬児いふやうハ。老人の夜道おぶつる。此拵飯持て往くまくとく。
信ふきこゆれゆぞ。賢兵衛よくぐ心ばきくくれとて。彼握飯を懐ハして出行
まり。かくく踏程十四五町も歩ねとおりふ頃傍ふ堤の蔭ふ蒲穂子と
呼ぶ非人の小家ゆりるれが。彼小家の裡より年紀三十ばかりとおぼき

乞食女。餓ふ労れ動靜ふて。蒭垂より面を覗。賢兵衛とうとて云
るれハ。此四五日飯ふ餓く。今ハ玉緒も絶べくなり。わるれ清情を哀れ
給ひて。食物ゆぐ旅ふまられと。呟きく這出ける。賢兵衛不便ふおぼ
えく。慌倉懐なれ拵飯をうり出。彼的ふ無くければ。女ふさも
嬉氣ふ押頂て。ゆがて一握の飯を拿て。只一口ふ食ふと齋く忽ち全
身震ひ出て。血を吐くゆ斃。賢兵衛是を視て大きふ驚き。こいふ。
想ひもかけざる謀くれよと藥を用ゆ。水をふくて。さゆぐと介抱られ
ども。更ふ甚驗もなし。素這握飯ハ女婦蓬児が惡計ふて。竊ふ賢兵衛を
毒殺ん為。砒霜斑猫の毒を調じて。此飯ふ加へくれゆる。斯く命を失て
なり。されば毒氣ハいふく凌りて。五臓六腑を痛るゆぞ。惣身紫色ふ變じ
く。竟ゆハ狂死ふ死ふりれ。賢兵衛ハ拵飯をうるるふいふゆも毒

ある物とおぼし。其色黄ばみたるえなれば。はじめて蓬児が惡討なるべと悟り。此上は蓬児を捕へて仇討さむし。且這死骸は後ふ荒けり得させんと。即便道を轉じて。我家へと急ぎ帰られ◎さても慳貪波蓬児は。翟麦を匂ひて。早五日目とりの夜なりければ。愚六が飯宅の屋きを待佗び。今宵は是非ふ殺りなん。さるべ翟麦が身代は温りのこれるべ。握飯の毒ふ中つて。渋紙差爺が露命は。今宵の中に果さむ。然る上は。愚六どのを夫ふ定めて。永く浮世を楽まん。且は酒ふ鶏卵を調じて。然人の飯宿を俟ばやと。獨り含笑て居る所へ。いつの間ふ。戸口の主の賢蔵。動静を窺ふ立聴して。渋紙差爺が露の命は。今宵の中にも果さざりけと。声怒ぶじて納戸よりかけ出れば。蓬児を大きふ慌忙き。吻と。らそ坐を立なるも。傍なる火桶と拿て。眼潰しふ投うけつ。背[illegible]

へと逃出るり。賢兵衛とるるはやるけみれども。眼は灰入りられば狼狽る其間ふ。蓬児は裏路よ走り出る。彼麻子を沉められ古井の中に大きなる石を投落し。吻と一声叫びて。入水の体よりて。偖裏路より逃れるが。所詮とるあへなぶはり難し。さるばは古井ふ赴うんとて。本国伊勢へとて。ざじるれ。偖まと賢兵衛を遥後れて裏路へ出るに。蓬児は古井の底ふ身を沉めし体なれば。介歯して憤りぬ。されば且。死骸を引上よとて。近傍の人々に招きて。縄を下し。碇よかけて曳上るふ。蓬児が死骸あへめで。隣家の愚六が妻なる。麻子あてありられば。案の外なれることよとて。呆れ駭くばりなり。人々甚屍を撿るに。四五日の日数経るとおぼしくて。五体を水腫よ腫満て。臭氣鼻を突ち。再瞳と見るべらもあるべ且愚六ふ告よとて。愚六が家よ人を馳はべ。主はあへふに在合べ各位左右

と商議して。上を下へと騒動せり◎さても人賈人愚六を瞿麦丸奪ひ
のこなるべし。已に千石原の松の木に縛られしが。辛じて命丸助う。
方便大磯に立帰りて。日逢児が動静を窺ふに。惡計露見して逐電する
由なれば。駭くべきおそれと好ましく。今般の惡巧さべて空しくなり憤りなれば。
此上は賢兵衛に無失をしひうけ。解死人の代にとて金銭を貪らんと。又
ひとつの奸計をめぐらしれども。堅かる証拠もあらざれば是非なく麻子
が死骸を花卉にして。おのが手ぼうに害せしるに押つけて。偖止ぬ。さふ又
賢兵衛は其夜の曉非人の小家に馳到て。彼的が死骸を葬り終させん
とおもふ所に。夜視なりし女あらんで。雌狐の屍とおぼしきものを。
近侍く熟こなるに。疑ひもなき小女郎狐が死骸なり。賢兵衛はそこ
ぞくと流して。さて此狐日頃の恩を酬いんとて。假に色食の女と化し

彼握飯に毒あるを悟りて。我が命を救へるおのが命を捨るよかる
畜生ならん。節を二つ義を守りて。恩あり答へけるものを人と生れ
蓬児が行蹟。畜類に劣れり。奴うれ。今退いて考れば。木像をうしろひ。
瞿麦を勾引したるも。彼奴が所業に究まりぬ。さるにても此狐を不便
の死状に遂けれよと。悲歎の泪にくれ。まづ狐の屍を抱きてなが
家にぞ帰りける。三助狐出まりて。小女郎狐
が亡屍にとぶり注れ。声を放ちて悲く形勢。目もあてられぬあり。
賢兵衛は三助狐が愁傷と想像れば。いとど不便いや増りて。此うへは
ふ葬ふ。とてとべーとて。人のおとく柩よりあ。阿胴を汲て香花をそ
向け。傍を拭きく讀経しけるも。後の園にあで埋めまられ。試附三助狐
を。人をも懼れを附添ひまりて。穴の傍に踞。うくと泣き叫びて。

三助狐
妻の小女郎狐が
妻死を視て
愁歎の体

妻の別れを悲しむ風情ゆゑ。あるとのるくぐも感涙をぞ催し給ふ。さて一塊の塚を築いて。其名を小女郎塚。あるひは狐塚とも呼べりしが。今も大磯の江邊にあり。標の塚を残すとなん。かくて後四十九日といふ夜ゆめうつゝに。小女郎狐が霊魂。質兵衛が枕上にあらはれ。素戔嗚夫婦のりの。父の歓。千歳の老樹を竟むりのなるが時到りぬとして。月日空しう過し侍りぬ。されど狐の通力をもて。末来記を探りこゝ知るゆゑ。汝親子再びめぐりあふ時まぢかゝるべし。必ず甚余苦あるべしとて。これぐ仇ちも報ゆ。只今汝の命を代りし妻が善因。後果として善果となりて。再び汝の酬恩をなして。老樹を亡ぼす時あるべし。天理彰照。善悪かならず應報あり。娘婿妻が生別を。前世の業因とあきらめ給へ。假令一たび別るとも。父子の因深ければ。再會の時まぢかなんぬ。疑ひ給ふなとて。睡りの夢を覚ましぬ。質兵衛はうつゝに聞くゆゑ。生者必滅。會者定離。夢幻泡沫の浮世の中。もとくべきもの婆婆の光景。今年の花はかなく枯るゝ。去年の人は同じかるべし。抑搦内が自滅より。主家の人ぐ寒く苦ゆ呻吟。且寵愛の瞿麦を。行方もなくねのこなるべし。後妻が奸計ゆゑ。小女郎狐が亡びしことまで。皆是ぞ己が業因なり。忽然念起の無明ゆゑ。快楽の天。限りあれば衰没の悲めり。生死の友ゆゑ命日て別日易く。輪回の門ゆゑ別れく會難しと。ものゝ。あはれ菩提の種を植て蓮の臺ゆ上にぞ。髪剃ふつと切拂ひ。鎌倉永福寺なる。葉上房。栄西律師乃

徒弟とあり。法名を西念と改めて。家財のことごとく御寺に施入したるが。
これより後。笈を擔ひ行囊をかけて。諸國の佛閣に順拜せごやとて。
斗藪行脚の身となりぬ。

○賢岳術佛門に入て西念と法号し回國修行の後三助狐ぐるひ
ふるして再び瞿麥に會ふ。蓬児が女夫愚六道心に出會ふ。
且愚六自滅して後麻子が執念の小蛇を解脱せしめて阿漕
浦に追善をいとなむ。千騎崖に雙を穀して後安達景盛が慈
愛ふるして主家を起し。瞿麥立身のゝち茲に千歳の老樹と化して。
狐が寃を穀いしるの類。太ぢ混合する條。後編に委う記す。

第十回

責　對妄執蛇

122
11
42

法華經

宮內廳書陵部藏